

一人一人の学びを大切にした授業の創造

～学び合う・聴き合う関係を土台として～

奈良市立伏見中学校

生徒の課題を教員が共通認識し、その課題の克服と学力の向上を目指した。一斉授業の中に4人の学習班による学び合いを効果的に取り入れる授業を研究。授業研究・研究討議を年間のべ15回実施。生徒の課題に関する意識調査を定期的に行い、学力との関係进行分析・検証し、授業の改善に生かした。

(1) 取組の実際

① 研究方法 (図1参照)

ア. 研究推進委員会

メンバーは、校長、教頭、教務主任、研究主任、各学年2名の研究推進委員である。

イ. 年間5回の授業研究

各学年1クラスのみを残し、学習班による学び合いを取り入れた研究授業を行った後、学年ごとに研究協議を実施した。その間、部活動の巡回を学校支援地域本部事業の一環として保護者ボランティアに協力していただいた。

ウ. 年間3回の校内全体研修

各学年・教科の取組の報告やデータの分析を行い実践に活用した。授業研究、全体研修は奈良教育大学小柳和喜雄教授に御指導いただいた。

エ. 先進校の視察

東京大学大学院佐藤学教授が提唱する「学びの共同体」を実践している中学校や御池中学校の「読解科」の実践を視察した。佐藤学教授によると学び合いとは、“つまづいたり、困難に直面したりした生徒が「どうするの？」と援助を求め、他の生徒が応える関係”のことである。

オ. 質問紙「自分に関するアンケート」

以下に述べる五つの課題に関わる24の質問を設定し、それを「自分に関するアンケート」とした。回答方法は1を肯定的、2をやや肯定的、3をやや否定的、4を否定的とする4件法である。全校生徒を対象に5月と11月に実施し(最終年度は7月にも実施)、その結果の分析を行った。

② 課題の共有化と主題設定

全職員で生徒の課題を出し合った。それをKJ法により五つに分類した(写真1・2参照)。それが伏見中の五つの課題である(図2参照)。これらの五つの課題の克服と学力の向上を目指して、一斉授業の中に4人を基本とする学習班によ

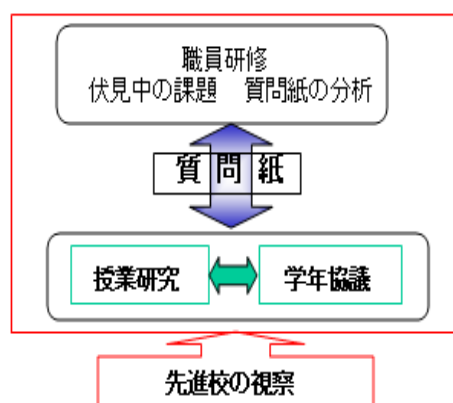


図1 本実践研究の構成

るグループ学習を取り入れた。この取組を通して、学び合い・聴き合う関係を作り出し、コミュニケーション力を高める等、課題の克服を図ると同時に、学ぶ意欲・学力の向上につなげようと、主題を「一人一人の学びを大切にした授業の創造～学び合う・聴き合う関係を土台として～」とした。

- 伏見中の5つの課題**
1. 自分に自信がもてない
 2. お互いに高めあう意識が低い
 3. 関わり・コミュニケーションが苦手
 4. 自尊感情
 5. 家庭学習・家庭生活

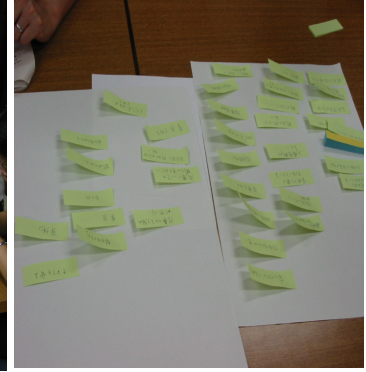
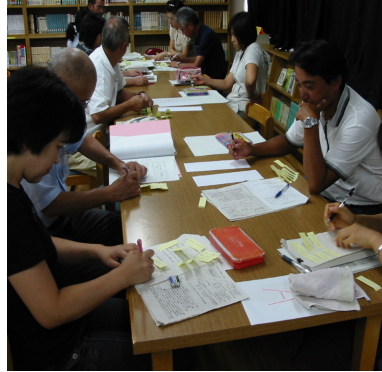


図 2

写真 1 職員研修の様子

写真 2 KJ法による分類

③ 新学習指導要領との関連

新学習指導要領の柱の一つである「思考力・判断力・表現力」を養うために、学習班で考える時間をとり、考える習慣を身に付け、自分の考えを広め・深めることをねらった。また、学習班の話合いやクラスの発表のほか、説明・討議・記録などの「言語活動」を取り入れた（図3参照）。

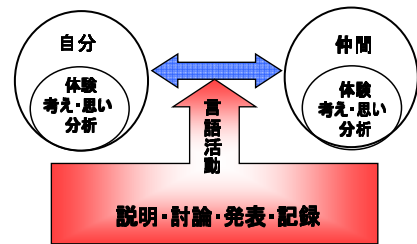


図 3

④ 伏見中の授業スタイル

「自分に関するアンケート」の結果から、五つの課題のそれぞれの相関関係を調べてみた。また、五つの課題の克服に取り組むことが学力の向上につながるのかを調べるために「自分に関するアンケート」と学力との関係について分析した。その結果、五つの課題とも学力の高い生徒（H群）の方がよいことが分かった（図4参照）。このことから、五つの課題の克服が学力の向上につながると思った。

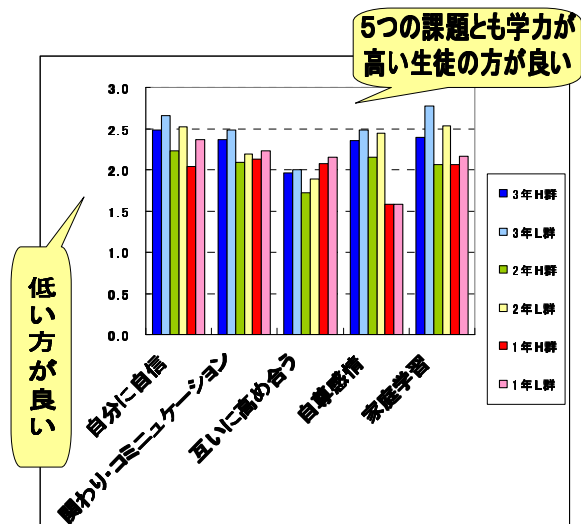


図 4 学力と五つの課題の関係

そこで、授業にグループ学習を導入し、学び合い・聴き合う関係を作り出すことが、五つの課題の克服と学力・学習意欲の向上につながると考え、伏見中の学力向上モデルとした（図5・図6参照）。

さらに学び合いを効果的に進めるために、単元における学び合い設定の時期や、1時間の中の時間帯、学び合いのルール、教員の効果的な働きかけ、全教科での「課題の設定」などを研究し共有財産として蓄積してきた。

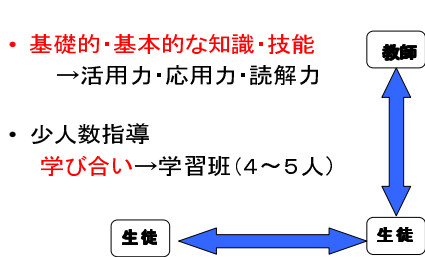


図5 伏見中の授業のスタイル

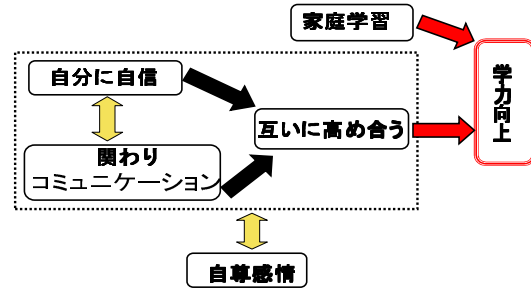


図6 伏見中の学力向上モデル

(2) 3年間の取組の成果と今後に向けて

① 成果

本校の取組は特別なものではなく、全教員で一歩ずつ前進してきたささやかなものである。しかしながら、3年間、全教科、できる範囲で学び合いのグループ学習を追究してきた結果、以下に示す成果があった。

ア. 生徒

研究授業後の生徒対象の「授業についてのアンケート」の「みんなで考え合ったり、意見を言い合ったりするのはすごく楽しかった。授業により一層集中できた。」の感想に代表されるように、グループ学習に対する肯定的な意見が圧倒的に多かった。とりわけ学力の低い生徒にその傾向は顕著であり学習への意欲喚起に結び付いていると考えられる。



写真2 学び合いの様子

イ. 教員

教員の「生徒たちの変化」に関する自由記述のアンケートでは、ほとんどが肯定的な変化をあげていた。主なものは「学びから逃げようとする一部の生徒をつなぎとめ、生徒同士の関係がより穏やかで柔らかなものに変容してきた」「研究授業や研究協議を通して、生徒理解がより多面的になった」「教科間のつながり・連携が深まった」などであった。

ウ. 学校評価

本研究は平成20年度から始まったが、過去3年間（平成19年度～平成21年度）の生徒及び保護者対象の学校評価アンケートは、ほとんどの項目で肯定値がアップした。中でも授業や教え方に関する数値は全て上昇した。とりわけ「教え方にいろいろな工夫をしている先生が多い」（生徒対象）は60%から77%と17ポイント、「子どもは授業が分かりやすいと言っている」（保護者対象）は45%から58%と13ポイント高くなった。

エ. 「自分に関するアンケート」

現2・3年生が昨年度からよくなっている項目及び現1年生が5月から顕著によくなっている項目は、関わり・コミュニケーションに関する項目であった。

また、今年度5月と7月を比較すると、全学年で5項目とも7月の方がよくなった（図7参照）。特に、自分に自信に関する項目と関わり・コミュニケーションに関する項目については、有意差があった。

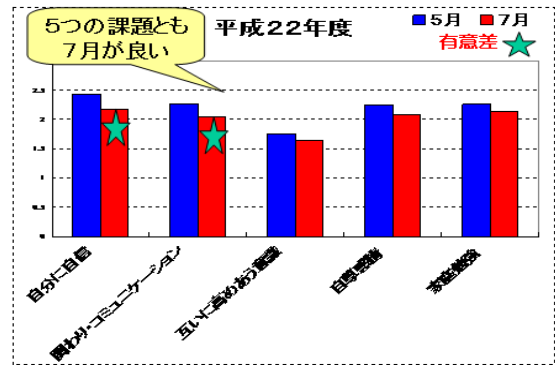


図7 五つの課題の変化

② 課題

さらに学年ごとに分析したところ、以下のような結果になった。これらの図は、各学年1学期の中間考査から期末考査の伸びと五つの課題との関係について示したものである。成績がよく伸びたものをHH群、少し伸びたものをHL群、少し下がったものをLH群、下がったものをLL群としている。五つの課題について、7月と5月を比べよくなっているものは「+」にそうでないものは「-」に表している。

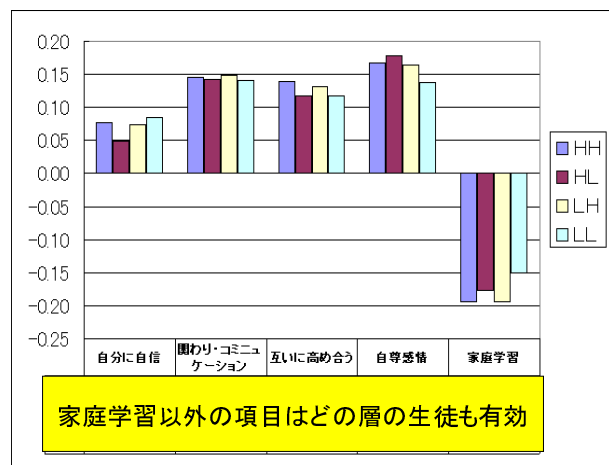


図8 第1学年

第1学年は、家庭学習に関する項目を除く4項目が、どの学力層の生徒にも有効であった（図8参照）。

第2学年は、自分に自信に関する項目やコミュニケーションに関する項目が全ての学力層の生徒に有効であった（図9参照）。

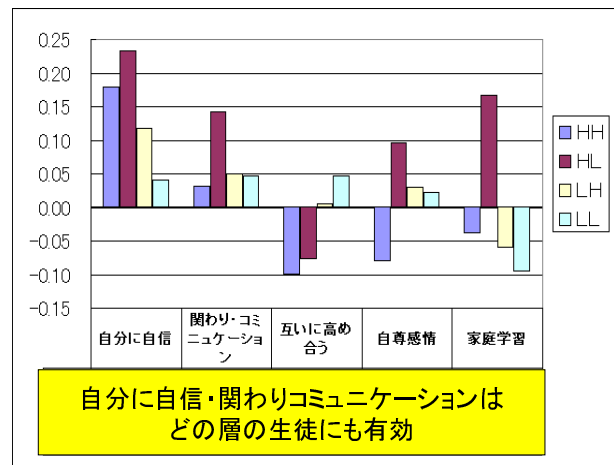


図9 第2学年

第3学年になると学力層によって捉え方が変わった（次のページの図10参照）。中間考査から期末考査へと学力が伸びた（HH群）にもかかわらず、5項目とも「-」になっている。これについては、進路を目の前にしてさらに自己目標を高くしているためであると考えられる。しかし、学力の低い生徒（LL群）は5項目全てが「+」になっている。これらのことから、学力の低い生徒には学び合いを取り入れたグル

ープ学習は有効であるといえる。一方、学力の高い生徒は物足りなさを感じ、より高い課題設定を求めていると考えられる。

以上のことから課題として、次の2点にまとめることができる。

- ①家庭学習の弱さの克服を保護者との連携のもと、一層推し進める。
- ②全生徒が意義を感じる適切なジャンプ（チャレンジ）課題を開発し、共有財産として蓄積していく。

今後は、これら2点の改善とさらなる学力向上を目指し、研修を積み実践をしていきたい。

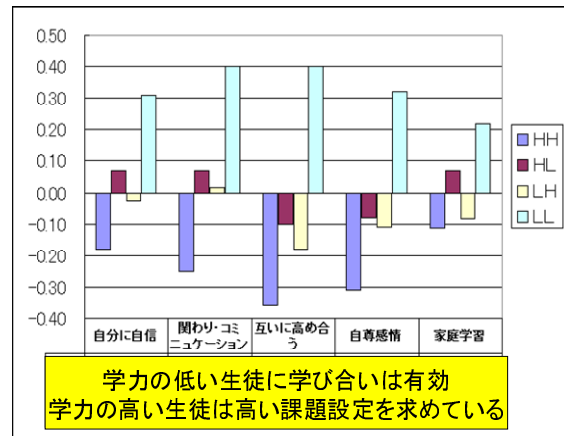


図 10 第 3 学年